

生教材の叙述に「起承転結」を取り入れる効果
EFFECTS OF “KI-SHO-TEN-KETSU” ON NARRATION IN RAW MATERIALS

小沢和子

Kazuko Ozawa

ウェルズリー大学

Wellesley College

東アジア言語文学部日本語学科

East Asian Languages and Literatures, Japanese Program

1 はじめに

基礎文法の習得が一通り終わった学習者は、中級日本語に進んでさらに語彙を増やし、より細かな文法の構造を勉強しながら、やがては次なるステップ、つまり様々な文化的な状況や話題に適応できる上級日本語を目指す。ACTFLの Oral Proficiency Interview (OPI) によると、限られた内容の伝達しかできない初級レベルから、自分の言いたいことを習った語彙や文法を駆使しながらある程度伝えられるようになる中級レベル、そしてその次に、より細かな描写や伝達が可能になる上級へ向かうという。コミュニケーションにおいて中級レベルから上級レベルへの移行を更に言うとは、ある事柄の説明が上手に順序正しく聞き手に分かり易くできるかどうかということ、つまり「叙述」が上手にできるかどうかで、中級レベルに留まるか、上級レベルに達したかが判定できる。例えば、今読んでいる本がどういう本かを説明したり、アメリカの学校制度がどういう仕組みで成り立っていて、自分はそれについてどう思っているかを述べたり、また、昨日学生食堂でおもしろいことがあって、それがどんなことだったかを友達や先生に話したりする場合、聞き手を混乱させることなく内容が正しく伝えられるかどうかで、学習者の日本語力が判定できる。「叙述」は、このように、あるものの内容や状況を詳しく説明することもあれば、自分の考えや意見を述べる場合もあり、或は、物語や事件などを相手に話して聞かせる場合などもある。今回、取り上げる「叙述」は、ストーリー性のあるものを、人に分かり易く話したり、記述したりするもので、中級日本語の授業で私自身が実践した試みとその手順と結果、そしてその効果を具体的に報告し、今後の課題についても考えてみたいと思う。

2 叙述に「起承転結」を使う目的

例えば、「休暇中であつたおもしろい出来事について話して下さい」と聞かれた時、日本語が母語話者でも最初は戸惑う人が多いのではないだろうか。何をどこから、どのように話せばよいのかは、慣れていない者にとっては至難の技である。しかし、これはある種の「慣れ」が必要で、話の展開の仕方を練習することによって、日本語学習者も、順序ただしく分かり易く話せるようになるのではないだろうか。もちろん、これは能力に差があり、簡単にできることではないが、

普段から練習を重ねることで、話の展開の「コツ」のようなものがつかめるに違いない。

これまで、中級日本語の学習者に物語などの「あらすじ」を話すように指示すると、最初から本文とほぼ同じように細かく説明しようとする者がいたり、あるいは、端的に述べようとするあまり説明が大雑把になり大切なポイントさえも抜けてしまう者がいた。何故、このようなことが起こるのだろうか。まず、本文と同じように叙述しようとするのは、学習者が詳しい説明がいいと思っているからだろう。初級ではできない説明を詳しく述べることで中級らしく見せたいという思いが学習者にあるからだと思うが、これでは、だらだらとメリハリのない話しになり、聞き手には苦痛である。これとは反対に、短く話してあつと言う間に終わってしまうのは、話のポイントが掴めず盛り上がりや全体のバランスを考えていないからだろう。この問題を解決するために東洋に伝わる四段構成の「起承転結」の活用を考えた。

日本語大辞典によると「起承転結」は本来、漢詩の句の配列で、起句、承句、転句、結句の名称がつけられたとのことである。これが文章のまとまった組み立てに使われるようになり、起（き：導入部）、承（しょう：展開部）、転（てん：盛り上がり）、結（けつ：締めくくり）として日本でも古くから使われて知られてきた。しかしこの四段構成についてはオンラインなどで見ると、一方で否定的な意見も見られる。それは、「文章の構成としては単純すぎる」「文章の構成は必ずしも起承転結とは限らない」などだ。確かに現実にはもっと複雑な構成の文章が多いのかもしれない。けれども、この「単純な流れ」を、中級日本語の学習者の叙述の初期の練習に結びつけてみるのはどうだろうか。叙述、つまりここではある物語を話したり記述したりする場合だが、成功の鍵は「話の展開」にあると言える。話が自然に順序正しく進められ、ヤマ場をつくりながら相手に伝えられれば、それは上手な叙述であると言える。その「話の展開」の練習には、むしろ「起承転結」のような単純な流れから入った方がよさそうだと考え、この手法を取り入れることにした。但し、ここでは、その目的が学習者に「起承転結」の構成を理解させることではなく、学習者の叙述練習のために教師が用意するひとつの「手段」として利用するものであることを、断っておきたいと思う。

3 対象となる学習者とその背景

ウェルズリー大学では日本語1年生（JPN101/102）と日本語2年生（JPN201/202）をそれぞれ週5日70分授業で行い、教科書はJSL (Japanese: The Spoken Language) vol.1-3を終えた後、日本語3年生（JPN231/232）に進む。

教科書は「中級の日本語」(The Japan Times)を使い、週3時間の授業で副教材として多数の短編小説、映画、TVドラマ、TVCMなどを併用している。学習者の数は2010年秋学期が12名、2011年春学期が11名で、全員に叙述の指導を行った。

4 叙述練習に「起承転結」を取り入れた教材

「蜘蛛の糸」(芥川龍之介 1918年)

「サザエさん」(長谷川町子作、四コマ漫画 1946年～1974年)

「おもひでぼろぼろ」(スタジオジブリ制作劇場アニメ 1991年)

「蜘蛛の糸」は「中級の日本語」第八課を終了した時点で、日本の文学紹介、敬語練習、宗教観についての話し合い等の目的で教材に取り入れた。

「サザエさん」は「中級の日本語」第十一課のトピックが「文句を言う」であったため、応用教材として使用した。

「おもひでぼろぼろ」は、春学期に教科書と併用しながら週1回のペースで11回、CHAPTERに分けて、主に聞き取り練習と文法の応用練習、またクラス内での話し合いの目的で使用した。

5 実践例

5.1 「蜘蛛の糸」

5.1.1 授業

授業では二回に分けて本文を読み、読解と敬語の練習をした。また、「地獄のにんじん」(日本昔話 毎日放送制作動画)というビデオを見て、本文との共通点と相違点について話し合いを行った。

5.1.2 叙述課題

次に、読後の課題を出した。それは、「『蜘蛛の糸』を、内容を知らない子供に5～8分程度で聞かせるように話してください」というもので、同時に、次のような指示も出した。

1. Avoid using difficult vocabulary.
2. Try to be clear about whom you are talking about.
3. Use appropriate conjunction すると／ところが／けれども／そこで etc.
4. Speak with right intonation and appropriate pose
5. Speak at a natural pace. (not too fast and not too slow)
6. Try not to speak in a monotone

(1)については、本文の語彙にこだわると少し硬い表現になるので、学生の使える表現、すなわち日本人の子供に伝え易い表現を使うようにとの狙いがあった。

(2)については一人語りであっても、あくまで相手に伝えるための叙述であること。(3)は接続語を入れることで、話の展開をより明確にさせる狙いがあった。(4)は自然な日本語に近づくために、正しいアクセントで、長音、促音にも気をつけ、適度の間(ま)をつけることを要求した。(5)は叙述が速すぎず遅すぎず、適度な速度で話すこと。(6)は平坦な話し方ではなく、抑揚のある生きた語りをしてもらおう狙いがあった。

この他に、学習者に与えた指示として「敬語は特に使わなくてもよい」とした。本文には敬語が多く使われて授業でも練習したが、敬語に注意がいて叙述に集中できなくなる恐れがあったため、普通の「です／ます体」を使って話してよいことにした。

5.1.3 問題点

以上の課題と注意事項を受けて「蜘蛛の糸」を話す、今まで学習者は週末の出来事やビデオの場面の短い説明等を教師の誘導や質問に添って話すだけの経験しか持たなかったため、この叙述課題は大きな挑戦で、先に述べたように、叙述が細かすぎたり、逆に大雑把すぎるものになる心配が教師である私自身にあった。

5.1.4 解決策 1

そこで、解決策の一つとして「起承転結」の構成を活用することにした。まず、授業で「起承転結」の構成を説明して、本文を四つにわけ、それぞれの **Key Words** を皆で探した。その結果は次のようになった。

(Key words)

起 (導入) : お釈迦様 極楽 はす池 陀多 地獄 血の池 悪人 蜘蛛
承 (展開) : お釈迦様 蜘蛛の糸 陀多 のぼり始める
転 (ヤマ) : ひと休み 下 ほかの罪人 糸 切れる
結 (オチ) : お釈迦様 悲しい顔 さんぽ

5.1.5 解決策 2

話を展開する上にヒントとなる絵を用意した。



5.1.5 叙述

学習者は授業外の空いた時間に教師の前で一人ずつ「蜘蛛の糸」の話を最初から始めた。その際、本文も **Key words** も見ることはできなかった。しかし、用意した絵は、学習者が見たければ見られるように机の上に置いておいた。

5.1.6 学生の叙述例 (録音からのコピー)

5.1.6.1 学生1

ある時お釈迦様は極楽の蓮池のそばを歩いていました。極楽の蓮池はちょうど地獄の上で、蓮池の中を見ると地獄が見えます。お釈迦様は地獄の針の山や血の池をみました。血の池にはたくさんの悪人がいました。その悪人の中でかんだたという男がいました。かんだたは人を殺したり家に火をつけたり悪い事をいっぱいした大泥棒でした。でもかんだたは一つのいいことをしたことがあります。

ある日歩いていたかんだたは蜘蛛を見つけました。その蜘蛛を殺さずにかんだたはたすけてやりました。

そのいいことを思い出したお釈迦様はかんだたを助けようと思いました。お釈迦様は蓮池の蓮の葉の上にある蜘蛛の糸を持って地獄へおろしました。その蜘蛛の糸を見たかんだたは大変よろこびました。かんだたはこれをのぼるとじごくじから出られる、いや極楽へいけると思いました。

かんだたは蜘蛛の糸をのぼりはじめました。大泥棒だったからのぼるのは上手でした、でも地獄から極楽までは遠すぎて疲れてきました。疲れていたから休もうとしました。休んでいたかんだたは下を見てびっくりしました。かんだたの下にはほかの悪人がのぼっていたからです。たくさんの人があるから蜘蛛の糸が切れると思って、かんだたはこわくなりました。それでかんだたは大声でこの糸はおれのものだからおりろ下りろと言いました。すると…かんだたがそう言ったあと、くもの糸がきれて、かんだたとほかの悪人はみんなまた地獄へ落ちました。

お釈迦様は極楽でそれを全部見ていました。かんだたがまた落ちるのを見て悲しい顔をしました。悪人はいいことをしてもまだ悪人だったからです。で、お釈迦様はまた歩き始めました。

5.1.6.2 学生2

ある日お釈迦様は極楽の蓮池のふちを歩きました。そして、蓮の葉の間から地獄の景色がみえました。地獄の血の池の中でその中でたくさんの罪人がうごめいていました。そのなかにかんだたと言う人が見えました。かんだたは人を殺したり、家に火をつけたり、たくさん悪い事をした人です。でもそんなに悪いかんだたでもひとついいことをしました。それは森の中で小さな蜘蛛を助けたことです。

お釈迦様はかんだたがひとついい事をしたのを思い出し、かんだたを地獄から助けようとおもいました。それでそばにいた極楽の蜘蛛の糸を手にとって蓮の葉の間から地獄へおろしました。元々血の池で苦しんでいたかんだたが上から蜘蛛の糸がたれているのに気がつきました。それで大変喜びました。これについて地獄から抜け出せるかもしれません。うまくいけば、極楽まで行けるかもしれませんと思いましたが、それでかんだたは上り始めました。

けれども地獄と極楽の間に何ばん里もあって、さすがもと大泥棒のかんだたでも疲れようになって少しやすむことにしました。休んでる間にかんだたはふいに下を見ました。そうすると、かんだたは自分の後で沢山の罪人たちがまるでアリの行列のように一生懸命上へ上へ上ってきたのが見えました。それでかんだたはすごく心配になりました。蜘蛛の糸はうすいで、こんなにたくさんの人がついているならいつの間にか切れてしまうかもしれません。そう考えなら、かんだたは下の人に下りろ下りろこれはおれのものだとわめきました。元々なんでもなかった蜘蛛の糸はかんだたがそう言った途端に切れてしまいました。それから、かんだたは他の罪人たちと一緒にもとの地獄へ落ちてしまいました。

これを全部見たお釈迦様は悲しそうな顔をしました。もともとかんだたを地獄から助けようと思っていたのに、かんだたは自分のせいでやはりもとの地獄へ落ちてしまいました。たすかることはできませんでした。しかしお釈迦様はそんなことには困りません。お釈迦様はまた極楽の蓮池のふちを歩きました。

5.1.6.3 学生3

昔々お釈迦様は極楽で蓮の池のそばに歩いていました。蓮の池の中にとってもきれいな蓮がありました。とお釈迦様は蓮の蓮の間から地獄の三途の川や針の山や血の池をみました。地獄は暗くてこわいところです。悪い人だけいます。地獄にかんだたという人がいました。その人は人を殺したり、家に火をつけたりほかの人のものをとった大泥棒だったから死ぬ時に地獄へいきました。しかし生きていた時に小さい蜘蛛を殺さずに助けました。

だから、お釈迦様はかんだたのいいことを思い出しました。かんだたの命を助ける為に極楽の蜘蛛の糸を地獄へおりました。地獄に血の池でかんだたとほかの罪人たちは浮いたりしずんだりしてました。かんだたは、

ひとつすじ 光っている糸はかんだたの自分のところへ来るのを見ました。かんだたは喜びました。地獄から抜け出せると思っていました。糸をのばりました。しかし地獄から極楽までに凄く遠いです

ちょっとのばるうちにつかれてきました。ちょっと休みました。やっと地獄から抜け出すから何年にも出さない声でしめたしめたといいました。それを言ったあと下をみました。たくさんの罪人は糸をのぼっていました。すごくこわかったです。だから、おいこの蜘蛛の糸はおれのものだ。下りろ下りろと言いました。すると糸はかんだたの上で切れてしまいました。それでかんだたも他の罪人たちも地獄へまた落ちてしまいました

お釈迦様は極楽から全部みました。かんだたのきびしいところを見て悲しいかおをしました。それで散歩を続けました。

5.2 「サザエさん」

5.2.1 授業

「中級の日本語」11課を終えた後、学習課題の「文句を言う」の関連教材として、四コマ漫画「サザエさん」を見せた。

5.2.2 叙述課題

この教材の課題は、特に細かい指示は出さず、絵を見て順に説明するようにと
いうものであった。



5.3 「おもひでぽろぽろ」

5.3.1 授業前

Chapter に分けたビデオを各自が事前に見て、内容質問のシートに答えてくる。ビデオはコース受講者だけに見ることができるオンラインで送信。

5.3.2 授業

Chapter の内容についての確認や、部分的な聞き取り練習、また併用している

教科書に出てくる文法パターンを使っての表現練習、Chapter 内のエピソードについての意見交換などを行った。授業では教師が取り上げたい箇所の部分映像や静止画像をあらかじめ Power Point に取り込んで使った。

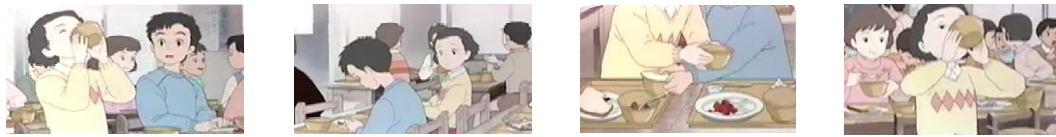


5.3.3 授業後

ビデオの中には毎回 Chapter の中に小さなエピソードがあるので、そのエピソードの内容を口頭または筆記で記述するよう課題を出した。

5.3.3.1 叙述課題 1

写真を見て日本語で説明(せつめい)しなさい 説明の中で、(ように(so that)/どうしても/ように V/うちに)の中から2つ使いなさい。(けれども/それで)の conjunction も入れなさい。



これは Chapter 4 の中に出てくる、主人公が小学生の時の 1 分ほどの短いエピソードである。学習者は授業前の予習でも、授業でもこの映像を見ているので、内容や使われている言葉については把握できているはずである。しかし、出来事を順に説明するために、このような静止画像を使うことは大いに助けとなる。この画像を映像から取り出す際に教師にとって鍵となったものは、「起承転結」であった。

「起」で人物の紹介、何をしている場面かが説明できるような画像。「承」で問題の発端、「転」でエピソードのクライマックス、「結」でどのように納まったかわかる画像を取り出した。

説明の中に文法パターンを入れるように指示したのは、併用している教科書「中級の日本語」(The Japan Times)で勉強中の文法の応用練習が目的である。この場合、必ず多めに文法パターンを用意し、学習者には選択で使えるようにした。

接続語の指定は、文章の流れが分かり易くなるようにとの狙いがあった。

5.3.3.1.1 課題 1 学生の記述例

学生 1 タエ子さんとすずき君はがっこうでひるご飯を食べていました。タエ子さんは自分のミルクをぜんぶ飲んでいました。すずき君は「どうしてもミルクを飲めない」と言いました。
(scene 1&2 の説明)

学生2 きゅうしょくの時間です。タエ子はミルクをよく飲みます。となりのすずき君は**びくり**したかおをして子を見ます。すずき君はミルクが大きらいですから**どうしても**飲めないのです。**けれども**今日、にんじんをのこしたからミルクは飲まなければならないです。たまねぎとだいこんが大きらい。タエ子は「今日はすずき君のミルクを飲んであげるとすずき君がこんど自分のだいこんとたまねぎを食べてくれる」と聞きます。クラスみんながよく**食べるうちに**タエ子とすずきはミルクをかえ**ます**。**それで**、タエ子はすずき君のミルクも飲みます。(scene 1~4 の説明)

5.3.3.2 叙述課題 2

蔵王に行ったタエ子ととしおはどんな話をしましたか。写真を見て説明しなさい。(教室内作業)



これは Chapter 15 にある 7 分ほどの課題 1 よりはずいぶん長いエッセイである。学習者には前回と同様にどんな話であったのかを書くように指示した。但し、この作業は 15 分ほどの時間内に教室で行う作業であったため、文法の指定はせず、また、各場面のポイントとなる事を英語で書いておいた。

写真 1 Intro: Explain the situation. Who are they? What they are talking?

写真 2 Development (Beginning of the story. What kind of feeling do they have?)

写真 3 Turn (Climax. What is the change?)

写真 4 Conclusion

7 分強のビデオ時間は長く、その間に盛り込まれるシーンはいろいろあり、どの静止画像を取り出すかが大きなポイントであった。

5.3.3.2.1 課題 2 学生の記述例



S1:タエ子ととしおはざおうで話していて、としおが急にタエ子に「どうして結婚しないか」と聞きました。タエ子はその理由は自分のこだわるせいかくのためだと思っていたので子供の時の話をはじめた。



S2:タエ子ととしおはざおうでおちゃを飲みながら話しています。タエ子はぶんすのわりざんのことを話しています。



S3:小学校五年生の時、タエ子は分数の割り算のテストで25点を取ったことがある。そのテストをお母さんに見せたら、お母さんはがっかりして、それでタエ子にやえ子姉さんに教えてもらうように言った。

S4:タエ子が小学生の時、ぶんすうのわりざんのしけんをお母さんに見せてくれた。その時お母さんもタエ子もがっかりした。それから、お母さんはタエ子にやえ子姉さんに教えてもらう方がいいと言った。

S5:それでタエ子はやえ子姉さんに教えてもらいました。タエ子はやえ子と違って、りんごをかいて分数の割り算を理解しようとした。でもタエ子は考えすぎて、りんごにこだわって、どうしてもわからなかった。



S6:しかし、やえこ姉さんにおしえてもらってもタエ子は分数のわりざんがいかでできなかった。タエ子は分数のわりざんのことをかえすぎてもっとできなかった。

S1:としおはそのこだわりが大事だと言いました。のうぎょうにもこだわりがひつようだと言いました。

6 結果と考察

6.1 「蜘蛛の糸」

「蜘蛛の糸」の内容を聞き手に分かり易く話して聞かせる作業は、想像以上の成果が出た。課題を出した時は教師の援助なしで5分以上の一人語りができるだろうか心配もしていたが、結果的には、学習者12人全員が5分より長く10分ちかく途中で大きな途切れもなく話し続けた。この大きな成果の一つの要因は、「起承転結」の構成を利用したことで、学習者自身が話の展開を容易に理解することができたと思われる。「蜘蛛の糸」がまさに「起承転結」の構成そのものであったことは幸いであった。もう一つの要因は、話の展開のヒントになる

「絵」を用いたことであろう。「絵」の存在で、学習者は話を忘れてもそこにヒントがあるから大丈夫だという安心感を持つことができ、その安心感が学習者の叙述を長いものにしたのではないかと思う。学習者の中には、本文と同じ表現を自分の「語り」に使う者も確かにいたが、それが長く続くことはなかった。これは、絵によって話の全体が見えているので、学習者自身が時間のバランスを考えることができた為と思われる。また「絵」がポイントとなる箇所を示唆しているので、大切なところを飛ばしてしまうことは決してなかった。最後に「蜘蛛の糸」は、一人語りをする題材としては非常に適していたと言える。それは、学習者が「蜘蛛の糸」の仏教観に興味を持ち、それぞれが創造力豊かに「語り」の練習をしてきたことから分かる。特に「陀多(かんだた)」の独白部分に独創的な工夫が見られ、聞き手を楽しませてくれた。学習者は今まで、これほど長く一人で日本語を話し続けた経験がなかった為、「蜘蛛の糸」を10分近く一人語りできたことは、学習者を勇気づけ、日本語の取り組みへの励みとなったのではないだろうか。

6.2 「サザエさん」

この四コマ漫画は以前から起承転結の典型と言われているほどで、日本語教育にも度々取り上げられてきた。日本語3年生の授業では、先に「蜘蛛の糸」という長い「語り」を経験しているため、正直、この「サザエさん」の叙述はそれほど困難ではないと予測していた。しかし、結果的に、この四コマの叙述は「くもの糸」よりも学習者には困難であった。何故か。それは、「蜘蛛の糸」は物語としてテキストがあった為、短く叙述する場合も、**key words**を拾うこともできたし、全体の流れもよく理解できたからであろう。しかし、「サザエさん」の四コマ漫画は、文字で表されているのは会話部分だけで、内容の展開は、学習者自身が自分の日本語力で創っていかなければならない。ここに難しさがあったのだろう。さらに、困難であったもう一つの理由は、今回の「苦情の言い方」というテ

ーマは極めて日本的、社会的、文化的な背景の下にある。叙述の課題を出す前に授業で内容を話し合ったが、学習者全員の把握が徹底していなかったことも考えられる。

6.3 「おもひでぼろぼろ」

このアニメ映画は主人公の子供時代の様々なエピソードが登場するので、学習者の叙述練習には大変都合のいい教材であった。また併用している教科書の文法項目がビデオの説明や内容についての話し合い時に呼応して使えたので、応用の場として非常によかった。叙述の際に、文法パターンを使用場所を指定せずに入れるように指示したことで、学習者が真に文法を理解しているかどうかを確認できた。エピソードを叙述するにあたり、映像から静止画像を取り出すことは、極めて大きな意味を持ち、選択する写真によっては話の展開がうまくいかないこともあった。写真を正しく選ぶことは、論理的な叙述への道であることが確認できた。学習者の叙述はエピソードによって上手にできる時があれば、あまり成果が見えないこともあったが、練習を重ねるごとに叙述に慣れ、個人差はあったが、概ね表現に上達が見られた。

7. 今後の課題

以上のことから、絵や写真は、中級学習者の初期の叙述練習には大きな助けとなり、論理的な展開に大きく影響することが分かった。それだけに、それらを、どこでどのような叙述のために使うのかが鍵となり、それを今後も見極めていきたいと思う。また今後、絵を使う叙述から絵を使わない叙述へどう発展させていくかも課題となるだろう。

第二に、叙述には欠かせない「接続語」があげられる。学習者の接続語の使用はまだまだ偏りがあり上手に使えているとは言い難い。接続語の使用範囲を広げて、さまざまな接続語を有効に使えるような指導法を見つける必要があると思った。

第三は、「起承転結」に留まらない複雑な構成の叙述への展開である。「起承転結」は流れが一定で4段階の構成のみであるため、ビデオなどのエピソードも、この4段階が当てはまるものを選んだ。しかし、より複雑な構成から成り立っているものも多いので、叙述練習に慣れた学習者がそうした構成に入れるように指導していかなければならないだろう。

最後に、こうした叙述が実践の場で生かされるためには、さらに具体的な叙述の場を明らかにしなければならないだろう。どのような場でどのような目的でどのような叙述が必要となるかを明示して、学習者の更なる叙述意欲を高められるよう努力していきたい。

参考文献

- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤眞理子・萩原雅佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子 (2001) 「ACTFL 入門」アルク
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1989) 「日本語大辞典」 講談社
- 樺島忠夫 (1979) 「文章作法事典」東京堂出版